

フォーラム

特定非営利活動法人 奈良21世紀フォーラム会報

2017年
No.31

ニュース

I 平成29年度通常総会開催

◎新理事長に植野康夫氏が就任

■ 植野理事長就任ご挨拶

当フォーラムは、2000年(平成12年)、奈良の新しい世紀での飛躍を願い初代理事長、当時の大和ハウス工業(株)顧問の石橋毅一氏のもとに有志が結束し発足しました。吉野川の源流の森を守る活動や奈良の食の探訪、書の文化の伝承、万葉蹴鞠の復元など奈良県の文化資源の発掘に努めフォーラムの基礎を築いてこられました。



平成19年から東大寺の森本公誠長老が2代目、平成25年からは堀井良殷氏が3代目理事長に就任され各事業を推進されました。

それぞれ、「万葉蹴鞠の復元」、「書の文化の伝承」、「奈良の歴史文化の探訪」、「奈良県企業の企業文化、企業風土の調査、紹介」、「吉野川源流の水源地の森を守る活動支援」などの事業について多くの会員の皆さん、ボランティアの方々の協力により大きな成果をあげてこられました。

歴代理事長はじめ当フォーラムの発展のためご尽力くださった皆様方に心よりお礼申し上げます。

今年は、奈良県で第32回国民文化祭・なら2017と第17回全国障害者芸術・文化祭が開催され、さらに奈良県が注目を集めることとなります。これを契機として、フォーラムの様々な活動を全国に発信してまいります。会員の増強、財政的基盤の確立に努め、新しい企画、分野に挑戦することを今年の課題にいたしたいと存じます。

会員の皆様にはなお一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

◎活動実施方針、事業計画が決まる

活動実施方針

- 奈良県の歴史文化とそれを取り巻く自然環境の魅力を再発見し、奈良県の活性化に結びつく提案活動を行う。
- 奈良県の観光立県としての持続的な観光振興のための取り組みに積極的に協力する。
- 奈良県内に根を下ろし、発展し続ける企業の伝統、文化、経営理念と奈良の風土とのかかわりを調査、記録し、県内で活躍する企業を県内外に紹介する。

平成29年度の事業計画

- ①「万葉蹴鞠」の復元
- ②「書の文化」の伝承
- ③「奈良の歴史文化資源」の探訪
- ④「奈良県企業の企業文化、企業風土」の調査、紹介
- ⑤「吉野川源流の水源地の森を守る活動」支援

通常総会

平成29年度の通常総会を6月17日（土）奈良ロイヤルホテルに於いて開催しました。

総会では、平成28年度の事業報告と決算の承認、平成29年度の活動実施方針、事業計画及び予算を決定しました。

また、本年度は役員の任期満了に伴う役員改選があり、新たに花山院弘匡氏、高松啓二氏並びに谷口宗男氏、丸山隆司氏の4氏が理事に就任されました。同日開催された理事会において植野康夫氏が理事長、谷口宗男氏が副理事長に、中村優造氏は専務理事に就任。特別顧問には、引き続き森本公誠氏、山口昌紀氏の両氏が就任され、前理事長の堀井良殷氏が新たに就任されました。前専務理事の江並一嘉氏は相談役に就任されました。

なお、中村憲児氏（前副理事長）、飯田圭児氏、戸川和良氏は任期満了により理事を退任されました。（役員名簿は11ページ）



活動実施方針は前記のとおりですが、事業計画は、フォーラム発足時からの事業で

ある「万葉けまり」の復元、「書の文化」の伝承、「吉野川源流の水源地の森を守る活動」支援の3事業を継続するほか、「奈良の歴史文化資源」の探訪については、日本人の心の原点を探る活動として奈良県内の神社、仏閣を始めとする文化資源を顕彰し、新たな視点で紹介するとともに、食文化を発掘し、観光資源として地域活性化に結びつける提案活動を行ってまいります。

このほか「奈良県企業の企業文化、企業風土」の調査、紹介については、奈良の風土に育まれ成長するユニークな企業を対象に記録、調査し、経営トップの取材を通じて「奈良に息づく風土産業企業人列伝」として製作、刊行し、これらをシリーズ化する。また、既出版した列伝冊子の合本等の出版準備を進める。取材企業での製造・製作・展示等の現場や、様々な形で社会貢献に励む企業のリアルな姿に触れる機会として企業見学会を実施してまいります。これら2事業と合わせて5事業を行うことを決定しました。



同日開催の理事会の様子



講演される狭川先生



昼食会の様子

総会終了
後、狭川真

一氏（元興寺文化財研究所 副所長）から「元興寺文化財研究所の創立・発展・未来」と題してご講演を頂きました。同研究所の創立の経緯や文化財保存、修復などの実例を挙げたお話で、考古学や文化財が身近に感じられる大変有意義なひと時を過ごすことができました。

【平成29年1月以降に実施した事業】

1. 万葉蹴鞠の保存

◎春日大社奉納蹴鞠の実施

奉納蹴鞠の宴 in 飛火野 ―新たな奈良県観光資源に―

5月28日（日）、春日大社奉納蹴鞠行事として、万葉蹴鞠の奉納を同大社「林檎の庭」で行い、競技披露および一般体験を境内の「飛火野」で催しました。平成27年、28年の春日大社第60次式年造替奉祝行事として2年間にわたり春・秋に奉納し、

今回で5回目の奉納蹴鞠となりました。

当日は好天に恵まれ、多数の参拝者、観覧者に見守られ実施することができました。

今回も、奈良市観光協会のご協力を得て、女官役として第28代「ミス奈良」2名に参列いただきました。

出演者一同はおごそかに行列し、「林檎の庭」にて玉串奉奠など正式参拝した後、蹴鞠を奉納しました。古代衣装をまとったの華麗な足技に、一般参拝者からも拍手、歓声が沸きました。（『続日本紀』に蹴鞠などの一芸に秀でた者を表彰した記録があることに由来して実施）

飛火野へ移動後、開会の辞・来賓祝辞とともに競技が披露されました。奈良時代の宴で演じられた蹴鞠を競技形式で再現したものです。高位の官人衣装に身を包んだ左右のチームが得点しあうごとに、異なる雅やかな音色が演奏されました。その様子を貴人や女官に扮したスタッフが鑑賞し、興じる風景までを再現しています。

競技は、中学生チーム（YF奈良テソロ、ポルベニルカシハラ）につづき奈良万葉蹴鞠チームの順に行いました。また、観覧者の中から希望者を募り、飛び入り参加をして頂くなど、楽しい一時を体験していただきました。

以下、当日の様子を写真で紹介いたします（役職などは開催当時のもの）。



古代衣装で林檎の庭へ向かう出演者



玉串奉奠など正式参拝

第28代ミス奈良（左・中岡真子さん、右・仲谷遥さん）



フリースタイルフットボーラー飯島正人さんによる足技



参道を通り飛火野へ移動



森田康文・奈良県観光局長が来賓を代表して挨拶



花山院弘匡・春日大社宮司にご挨拶を頂く



江並一嘉・当フォーラム専務理事が主催者を代表して挨拶



ヤナギフィールド奈良テソロ、ポルベニルカシハラの皆さん



当フォーラム奈良万葉蹴鞠チームの皆さん



出演者・主催者・来賓 一同



天理大学雅楽部の皆さん

◎JOSKAS カップ万葉蹴鞠大会に協力

第9回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会(JOSKAS)および第9回セミナーが6月22日～24日の日程で2781名参加のもと札幌コンベンションセンターで開催されました。

現在、学会の会長は奈良県立医大教授田中康仁氏、事務局長に講師小川宗宏氏(当フォーラム・万葉蹴鞠鞠足)が就いておられます。JOSKASの会員にはサッカー経験者が多く小川宗宏氏もその一人で、高校時代の恩師、万葉蹴鞠制作委員であった元塚敏彦氏の示唆・指導を得ながら、本年度学会懇親会イベントとして万葉蹴鞠大会を企画、当フォーラムに協力依頼がありました。

懸案だった万葉蹴鞠を新しいスポーツとして普及させる良い機会ととらえ当フォーラムから2名を札幌に派遣しました。

6月22日学会初日、コンベンションセンター大ホールで懇親会が催され冒頭JOSKAS学会賞など表彰式が行われ、その後万葉蹴鞠の披露となりました。

(1)万葉蹴鞠とは(フォーラム蹴鞠総括 福嶋)

①奈良と蹴鞠、「春日大社奉納蹴鞠の宴 in 飛火野」DVD

②競技としての万葉蹴鞠:最も古い形態のサッカーとされる中国の蹴鞠を参考に創作、万葉蹴鞠大会を全国への発信期待。

(2)万葉蹴鞠大会進行(フォーラム企画委員・鞠足 濱村)

10チーム参加、トーナメント方式による勝者の決定、全試合審判として協力。

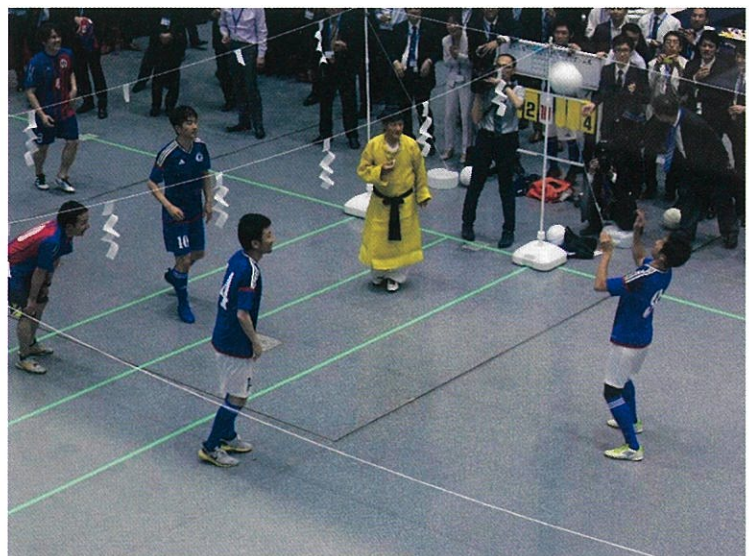
(3)万葉蹴鞠大会を終えて

会場の配置に合わせた競技規則を作成、競技者はサッカーマンとも云えるボールコントロールが出来、観覧者を巻き込み大変盛り上がり、万葉蹴鞠をスポーツとしていく方向性の一つが示された大会でした。

以下、当日の様子を写真で紹介いたします。(S・F記)



万葉蹴鞠を解説する福嶋重博・
当フォーラム監事



2. 「奈良の歴史文化資源」の探訪

(1) 聖徳太子の夢と失意の斑鳩の里、謎解き散歩

実施日平成29年3月22日（水曜日）

参加者 21名

法隆寺では、空を覆う松並木の参道の向こうに、中門や五重塔などの西院伽藍が見事な松林に包み込まれているのが印象に残る。

まずは、法隆寺と松の関係について説明が始まった。それは聖徳太子が幼少の頃に述べた「一時の栄えの桃の木より、万年の松葉が好き」の言葉にちなんでお寺が植育されたからと。そして、鎌倉中期の後嵯峨上皇の参詣時、お迎えをするにあたっての準備や清掃、整備などに当たって法隆寺を助けたのは東西両郷民であり、その時に松も植え足され、現在の形が整ったようだ。初めて聞いた話だった。これからの謎解きを楽しみに南大門、中門と歩を進め、現存するわが国最古の五重塔などの建つ西院伽藍へ。五重塔の前に佇み、その安定した美しさの理由や初重内部の四面に安置された塑像群で表現される仏伝の世界の説明。さらに、大講堂では仏さまの顔や様式が時代ごとに違うこと、その特徴などの話を伺った。



南大門前にて



五重塔前にて

次はいよいよ法隆寺の一千四百年の法灯を伝える本堂（金堂）へ。薄暗い堂内中央に大きな光背を背にした聖徳太子等身の釈迦三尊像、その東隣には創建法隆寺のご本尊である薬師如来像、そして、西隣には太子母君穴穂部間人皇后の冥福を祈って造られたと伝わる阿弥陀三尊や仏の世界の四方を護る四天王立像など…。さすが宝の山、その迫力に圧倒されてしまった。

西院伽藍を約一時間で観て回り、少し早いが食事処の「布穀菌」へ。元男爵邸の重厚な佇まいの門をくぐると、一部改装された和モダン風の部屋で、斑鳩の名物、鶏の龍田揚げを中心とした奈良食材を使った食事に舌鼓を打つ。食事が終わると、この日のメインである「お会式」についての説明を受け、のちに主屋を背景に集合写真に収まる。



いよいよ「お会式」の会場である聖霊院へと向かう。

法会は一時から始まるが、場所取りのため約一時間前に着き、それぞれの席を確保する。太子信仰の殿堂は薄暗いが、内陣の華やかさはお会式ならではのものだという。赤、白、黒や黄色などのお供物が、中央にしつらえられた壇上に供えられ、壇の左右には「大立山」といわれるお供物で築かれた山が一对置かれてある。お餅や蜜柑、柿揚げて飾られたうえに米粉で作った水仙と梅が並べられ、頂上には彩色された団子の鳳凰や燕が飛び交い、内陣はあたかも極楽浄土のようになっていた。

お会式の時間が近づくと内陣に笛や笙の音が通り抜け、奏楽が始まったかと思うと、僧が入堂し、やがて声明と管絃の響きが入り混じって幽玄な仏教世界が広がった。

詰めかけた大勢の参拝者は、冷えとたたかいながらも厳粛に進められてゆく法要に太子信仰の一面を感じとることができたようだ。

終了後は、大宝蔵院をめぐり、お会式の供物を展示してある律学院を見学して、最後に法隆寺の建てられた理由や、再建非再建説、そして、太子薨去のずれや、死因の謎についてなどの説明を受け、この日の予定は締めくくられた。(N.N 記)

(2) 幻の天理軽便鉄道跡をたどる

実施日 平成29年6月2日(金曜日)

参加者 17名

行 程 「平端」駅 ―線路跡の道路を通り― 船墓古墳 ― 食事処うぶす
なの郷「TOMIMOTO」 ― 安堵町歴史民俗資料館(見学・説明) ― 木
戸池築堤(鉄道跡地として安堵町指定文化財に指定) ― 軽便鉄道「新法隆寺」駅跡・
JR「法隆寺」駅前

平端駅に集合。参加者の顔が全員そろったところで出発する。目的地は JR 法隆寺駅である。これから歩くコースは100年前に天理軽便鉄道という小さな鉄道が走っていた軌道跡である。76.2センチという幅の狭い軌道の鉄道だった。軌道はいま乗ってきた近鉄電車の半分しかない。こんな狭い幅の線路は、現在の感覚では遊園地の乗り物だ。これが、天理軽便鉄道である。



明治の終りに営業認可を受け大正4年に開業している。当時、近鉄電車はまだこの辺りまで開通しておらず、天理教の信者が「おちばがえり」と称し本部にお参りするには、当時の国鉄関西線の駅から歩くしかなかった。参拝客の便宜を図るための軽便鉄道は、天理―新法隆寺間を1日13往復し、運賃は片道18銭だったという。

その後、大軌鉄道(現在の近鉄)線が開通すると、大正11年に平端、天理間は大

軌鉄道の広軌の鉄道路線として改修される。現在の近鉄天理線である。平端から西はほぼそそと営業されたが昭和20年頃運休止昭和27年廃業になった。これが今回の約6キロのコースである。

西へやや北向きに約3m幅の道路が一直線に伸びている。平端駅から少し歩いたところの電柱の表示板に停車場線とあり、この道が軽便鉄道の軌道跡であることを示していた。途中この道路わきに土手のような盛り土の部分があるが、駅の跡だという。

今回のコースは、一帯が西名阪道路の開通と工業団地の開発で寸断され、旧安堵駅間付近までジグザグにたどることになる。

最初に立ち寄った融通寺は、額田寺の北部にあり、境内のこんもりした森が船墓古墳といい、この地を支配していた額田部氏の先祖に関わりがあるそうだ。

その後大和中央道、西名阪道を横切り安堵町に着く。まずは食事処「うぶすなの郷 TOMIMOTO」へ向かった。このホテル&レストランは安堵町の生んだ陶芸作家富本憲吉の生家が記念館となっていたのを2012年閉館されたのを機に改装されたもの。旧家のたたずまいは、今も健全で格式の高さを偲ばせる。昼食は落ち着いた雰囲気の中であつくりと舌鼓を打つ。食後、軽便鉄道のあれこれの説明を聞き、安堵町民俗資料館に向かう。

門前の畑に灯芯作りに使われる藺草が植えられていた。町に寄贈された代々村役を務めていた今村家の重厚な門をくぐれば、屋敷は歴史民俗博物館になっている。前述の軽便鉄道の資料はもちろん、安堵町の民俗資料も展示され、学芸員から説明を受ける。

昔は、照明と云えば、ろうそくや灯明であり、火をともし灯芯を藺草から取る作業は女性の仕事だった。今も、伝統産業として保存活動が行われている。参加女性の気持ちを引き付けたのは、灯芯ひきの実演を見ることができたことである。熱心に質問をする光景がみられた。出来上がった灯芯は、見た目は細めのスパ

ゲティ、感触はまるでスポンジで油をよく吸うことが分かった。

見学が終ると、コースの残り半分を歩く。軽便鉄道の安堵駅跡を経てさらに西にむかう。途中、遺構がよく残る木戸池の築堤を見学し、畑中の随所に残る鉄道遺構の説明を聞きながら、軽便鉄道の新法隆寺駅跡に到着した。

文明が奈良に及び、開花に向かって歩んだ軌跡を知ることができた一日であった。

(N.N 記)



融通寺境内



木戸池の軽便鉄道遺構

3. 奈良県企業の企業文化、企業風土の調査紹介

◎企業見学会

（株）古梅園会社見学会を開催

実施日 平成29年1月24日（火）

参加者 20名

今回は、1577年の創業以来400有余年にわたり油煙墨の古来製法を今日まで引き継ぐ奈良の老舗墨製造・販売店「（株）古梅園」の見学会とこれに先立つ講演会をあわせて開催しました。近鉄奈良駅ビル8階の「北京料理奈良百楽」に集合、東大寺学園中・高等学校教諭田上恵一先生から「書の力」と題しての講演をお聴きし、書の素晴らしさと永遠性を知ることができました。

昼食後、奈良市椿井町にある（株）古梅園に徒歩で向かいました。本店では松井社長から製造工程と使用する道具や原材料についてお話をうかがいその後竹住営業部長の案内で本店奥の工場を見学しました。先ず菜種油を燃やして煤を採る「採煙蔵」、次に膠を湯煎で溶かす釜、そして職人さんによる木型を使った型入れ作業。続いて灰乾燥の建物に入る。木型から取り出した墨はこの蔵で1週間から40日の間木灰に水分を抜かれていく。木灰の乾燥が終わった墨を別の蔵で薫につないで天井から吊るし半月から3か月間さらに自然乾燥する。乾燥が終わると磨きと彩色の工程を経て墨が完成します。



近鉄奈良駅から10分足

らずの静かな都心の一角にありながら、間口からは想像できない奥行きがあり工程ごとに建物が並ぶ姿は壮観でした。墨の伝統を継いで墨づくりに取り組む従業員や職人さんたち。黙々と作業するその姿に「古梅園」の魂がこもっているように感じました。（T. H記）

役員名簿

職名	氏 名	職 業（経 歴）
理 事 長	植野 康夫	(株)南都銀行 取締役会長
副理事長	谷口 宗男	奈良交通(株) 取締役会長
特別顧問・理事	森本 公誠	東大寺長老
特別顧問・理事	山口 昌紀	近鉄グループホールディングス(株) 相談役
特別顧問・理事	堀井 良殷	公益財団法人関西・大阪21世紀協会理事長
相談役・理事	江並 一嘉	元(株)近鉄百貨店 副社長
理 事	足立 伸之助	近鉄ケーブルネットワーク(株) 相談役
理 事	安細 恭弘	マルチメディアコンサルタント
理 事	猪熊 兼勝	京都橘大学 名誉教授
理 事	上野 誠	奈良大学 教授
理 事	卜部 能尚	ウラベ木材工業 代表
理 事	扇谷 泰之	(株)シードコンサルタント 相談役
理 事	岡橋 清元	清光林業(株) 取締役会長
理 事	岡村 元嗣	岡村印刷工業(株) 取締役社長
理 事	花山院弘匡	春日大社宮司
理 事	榎木 康雄	(株)日昂食品 代表取締役
理 事	菊池 攻	奈良トヨタ自動車(株) 取締役社長
理 事	久保 昌城	竹茗堂 左文 代表
理 事	小山 新造	小山(株) 取締役社長
理 事	近東 宏佳	共同精版印刷(株) 取締役社長
理 事	高松 啓二	(株)近鉄百貨店 取締役社長
理 事	豊澤 安男	奈良豊澤酒造(株) 取締役会長
理 事	中井 隆男	大和ガス(株) 取締役会長
理 事	中畠 實男	奈良中央信用金庫 相談役
理 事	丸山 隆司	KNT-CTホールディングス(株) 取締役社長
理 事	森下 泰行	元近畿日本鉄道(株) 副社長
理 事	森本 俊一	三和澱粉工業(株) 取締役会長
理 事	山本 太治	(株)三輪山本 取締役社長
専務理事(事務局長)	中村 優造	元新若草山自動車道(株) 取締役社長
監 事	中畠 大	中畠大会計事務所 所長
監 事	福嶋 重博	奈良県サッカー協会 名誉会長

(平成29年9月1日現在)

2017年9月発行

編集 足立伸之助、中村優造

発行 NPO 法人 奈良二十一世紀フォーラム

〒630-8244 奈良市三条町 511-3 奈良交通第2ビル